豊岡短期大学論集　No.14, 269～278（2017）

表現遊び運動指導の一考察

廣　田　邦　生

A study of expression play exercise instruction

Kunio Hirota

豊岡短期大学 論集
第 14 号　別 冊
平成 30 年 2 月 28 日　発 行

表現遊び運動指導の一考察

A study of expression play exercise instruction

廣田　邦生

Kunio Hirota

は　じ　め　に

飛行機ごっこ、「ブーン」「ブーン」。ぴょん、ぴょん 「かえるのぴょん」とぶのがだいすき「はじめにかあさんとびこえて、それからとうさんとびこえる。ぴょんかえるのぴょんとぶのがだいすき」。谷川俊太郎「かえるのぴよん」[1]の詩である。幼児は楽しく元気に遊び様々な遊びの表現を通して発育発達していく。しかし、近年、都市化や核家族化、少子化、情報化など社会状況が変化し、遊ぶ場所や遊ぶ仲間、遊ぶ時間の減少などを招いている。幼児にとって体を動かして遊ぶ機会が減少することは、その後の児童期、青年期への運動やスポーツに親しむ資質や能力の育成の阻害のみならず、意欲や気力の減少、対人関係などコミュニケーションをうまく構築できないなど、子どもの心の発達にも重大な影響を及ぼすことになりかねない。

これまでの幼稚園教育要領では、「環境を通して行う教育」を基本とし、幼児の自発的な活動としての「遊びを中心とした」発達段階に応じた指導をきめ細かく進めてきている。新幼稚園教育要領においても、この趣旨は変わらない。しかし、現行の幼稚園教育のねらいは、幼稚園修了までに育つことが期待される生きる力の基礎となる心情、意欲、態度などであり、内容は、ねらいを達成されるために指導する事項である。これらを幼児の発達の側面から、心身の健康に関する領域「健康」、人とのかかわりに関する領域「人間関係」、身近な環境とのかかわりに関する領域「環境」、言葉の獲得に関する領域「言葉」及び感性と表現に関する領域「表現」[2]の五領域から編成している。

新幼稚園教育のねらいは、幼稚園教育において育みたい資質・能力を幼児の生活する姿から捉えたものであり、内容は、ねらいを達成されるために指導する事項である。各領域は、これらを幼児の発達の側面から、心身の健康に関する領域「健康」、人とのかかわりに関する領域「人間関係」、身近な環境とのかかわりに関する領域「環境」、言葉の獲得に関する領域「言葉」及び感性と表現に関する領域「表現」としてまとめ示している。内容の取扱いは、幼児の発達を踏まえた指導を行うに当たって留意すべき事項である。[3]とされている。

本稿では、内容におけるねらいを達成する五領域の表現に関する領域「表現」について、音楽的リズム表現のみでなく、身体活動における「表現遊び運動指導の一考察」として、学生の指導における

私自身の研修としてまとめてみた。

1　「表現」を含めた領域相互間の関連性

健康――人間関係――環境――言葉――表現

これらの領域における関係においては、子どもが主体的に楽しく生き生きと活動を展開する表現遊びなどで相互に関わりをもって成り立つものである。

健康 においては、表現上明るくのびのびと、進んで運動し、他者とも信頼関係の中で情緒が安定している。 人間関係 では、そのほとんどが表現活動であると考えられる。幼児は、毎日の生活のなかで多くの人と関わり触れ合う中で他者を理解し自己を表現する。ここでは、他者がいて成り立つものである。 環境 は自然環境、宇宙環境、もの、数量、文字など人以外の環境が幼児の表現活動と関連する。 言葉 言葉も表現の一行為である。様々に変化させる言葉を使って表現活動と連動して表す。

このように一つの表現動作が各領域に相互に関わり成立していると考える。表現遊びを身体表現と考えた場合、日本幼児体育学会会長・前橋　明氏は、著「幼児のリズム運動」[4)] のなかで次のように記している。

（1）　身体表現のねらいとして

①　身体の動きの美しさに対する豊かな感性を持つこと

②　感じたことや考えたことを、身体の動きを用いて表現すること

③　生活のなかでイメージを豊かにし、様々な身体表現を楽しむこと

の３点があげられる。

その具体的な内容としては、

①　生活のなかで、様々な動きや音、色、形、感触などに気づいたり、楽しんだりすること

②　生活のなかで、美しいものや心を動かす出来事にふれ、イメージを豊かにすること

③　様々な出来事の中で、感動したことを身体の動きを用いて伝え合う楽しさを味わうこと

④　感じたことや考えたことを、音や動きで表現すること

⑤　色々な素材に親しみ、工夫して遊ぶこと

⑥　音楽に親しみ、歌を歌ったり、簡単なリズム楽器を使って身体運動の楽しさを味わうこと

⑦　自分のイメージを動きや言葉で表現し、演じて遊ぶ楽しさを味わうこと

などをとりあげている。

また、表現活動は、模倣（又は再現）と異なり、子どもたち自身の思いや考えを第三者に伝えることである。すなわち、自己表現する行為そのものが表現活動であり、指導者の指示や指導者の行う通りにする模倣とは全く違うものであると述べている。

（２）　幼児体育における身体表現活動の留意点

①　意欲を育てる活動を目指す。

ア）子ども自らが進んで活動に取り組みたくなったり、それを達成したときに喜びや満足感を感じることができるような活動を準備する。

イ）叱咤激励や賞罰によって活動する受け身の活動にならないよう、注意する。

ウ）“できた”という喜びを持たせるために、子どもたちに共感し、誉めて、認めていく

②　社会性を育てる活動を目指す

子ども同士が関わることのできる活動を、発達段階に沿って展開させ、個々の喜びだけでなく、集団で活動することにより得られる喜びや協調性を経験し、その喜びと関わりを共有させることが大切。

③　信頼関係を育てる活動を目指す

自分の思いや考えを第三者に伝え、それが受け止められて、表現は成立するため、思いを素直に伝えられるためには、指導者と子どもたち、または子どもたち同士の中に、信頼関係が必要となってくる。

④ 子どもたちの心に気おくれや感情の萎縮のないよう、常に開放的な雰囲気づくりに努める。

⑤ 活動中は、立ち止まって考える状態をつくらないようにし、常に身体を動かして、リラックスできるようにする。

⑥ 個々から出た表現には共感し、認めて、意欲をもたせるようにすることが大切である。特に、他者と異なった表現をした時には、皆の前で取り上げて、良い点や工夫した点を知らせるように指導する。

表現遊びにおける指導について、前橋氏は、ねらいとして、動きに対する豊かな感性、感じたことや考えたことを、日常における生活のなかのイメージを基本とし身体表現を楽しむとしており、その内容は、生活のなかでの音、色、形、感触、生活における美しいものへの心の豊かさ、感動した動きを伝え合う楽しさ、遊びの工夫、演じて遊ぶ楽しさとしている。

幼児期は、生涯にわたって必要な多くの動作の基本を多様に身に付ける時期である。表現遊びにおいては模倣（又は再現）と異なり、子どもたち自身の思いや考えを第三者に伝えることであり、自己表現を大切にする教育活動であることに着目しなければならない。保育者は、子どもの自主性、創造性を大切にし、環境の中にいる自分を見つけ、感じ、考え、行動（表現）することを大切にしなければならない。乳幼児期における自己表現は素朴な形で行われることが多いため表現の受容を大切にし、園児自身の表現に対する意欲を受け止め、生活のなかで乳幼児期らしい様々な表現を楽しむことができるようにすることが大切である。

また、子どもの運動遊びにおける表現活動は、特に幼児期において、豊かに体感させる指導が大切であると考える。幼児が、先生や友達と一緒に行動し、見学し、本物にふれたりすることで、現

実感覚の薄れを補い豊かな表現感覚を身に付けることができる。

次に、表現遊びと年齢別発達や遊びについて考えてみたい。

3　表現遊びと年齢別発達のかかわり

幼児期は、成長に向かって様々な動きを身に付ける基本となる大切な時期である。動きを通して身体活動を考えた場合、幼児の遊びにおける身体的表現遊びと幼児体育との関連性は否定できない。以下、小櫃智子代表による幼稚園・保育所実習パーフェクトガイド[5)]によると、例えば、幼児期（ここでは２歳児より論述）における遊びの特徴をとらえた場合、体を動かし夢中になって遊ぶことに喜び楽しむことが、発達年齢で身体的にコントロールが難しい時期である。また、絵本や紙芝居などイメージの世界を楽しむ。

３歳児では、行動範囲が広がり、好奇心も強くなり「なんだろう」「やってみよう」と物への関心が強くなる。また、気の合った友達同士で、ごっこ遊びなど、イメージを広げ簡単なストーリーで人物や動物と自分を同化して考え遊ぶようになる。

４歳児では、気に入った道具や場所を見つけて活動する。自分の経験や見てきたことなど遊びに取り入れようとする。自分たちで遊びが考えられるようになり、意欲的に取り組む。少しずつルール性の高い集団遊び（しっぽ取りゲーム、椅子取りゲーム）など、表現遊びが多くなる。人間関係では、感情が豊かになり、身近な人の気持ちを察し、少しずつ自分の気持ちを押えたり、我慢するようになってくる。

５～６歳児では、ごっこ遊びを発展させた集団遊びが活発に展開され、遊びの中で役割が生まれていく。ごっこ遊びの中で手の込んだ流れと様々な役割を考え出し、遊びはより複雑なものとなっていく。こうした遊びを試行錯誤しながら満足のいくまで楽しもうとするよう

各年齢の特徴

基本的な運動機能や指先の機能が発達し、それに伴い「自分で」「いや」など自己主張の姿勢が強く出る。（２歳児）

想像力が豊かになり、つくったり、描いたり、試したりする。友達とのかかわりが増える。共通のイメージを持って遊ぶ（３歳児）

言葉による伝達、自分の意思や考えを表現する力が身につく。絵本や紙芝居、言葉遊び（なぞなぞ、しりとり）など取り入れることが大切。（４歳児）

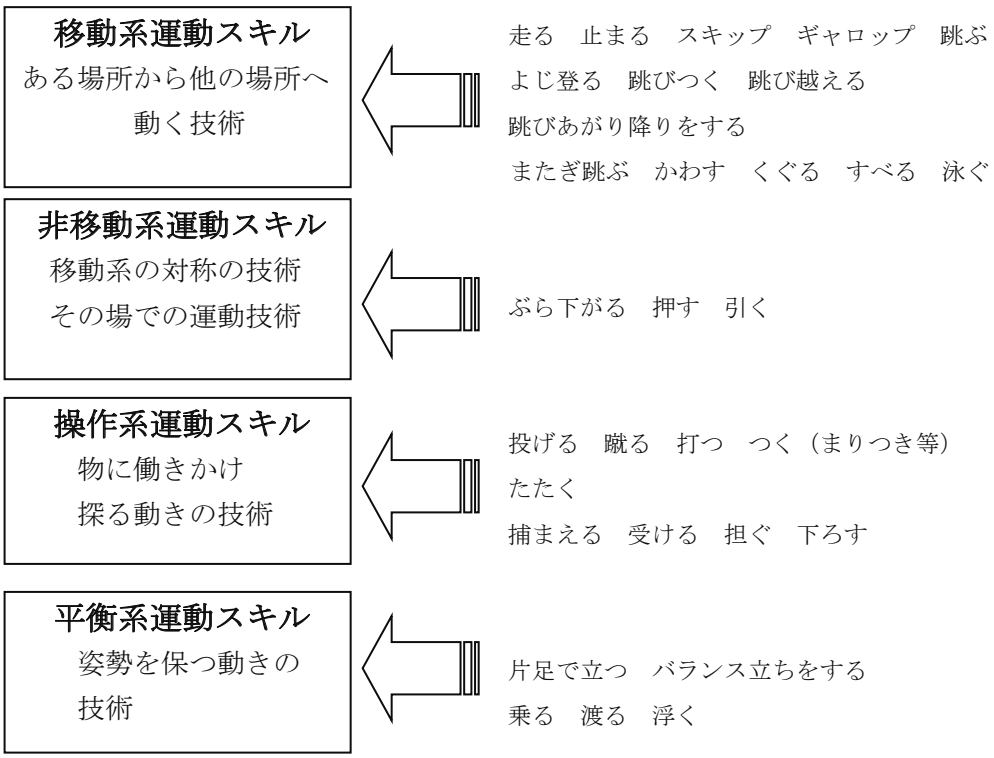
基本的生活習慣が身につき、集団遊びを一層楽しむ。思考力や認識力も高まる。自分を取り巻く社会的環境にも興味が芽生える。6歳児では仲間を大切にし、見通しを立てる力が付き、互いに認め合い自分たちで解決する。（５～６歳児）

になる。友達同士のよさが分かり、いろいろな考えを遊びの中に取り入れ、表現遊びをより活動的に展開する。

すべての子どもが、他の子どもと関わりながら主体的な活動を展開する表現遊びは身体的活動（運動）と密接な関連があり、５領域が相互に関わって成り立っていることを改めて確認しなければならない。

４　幼児期の表現遊びによる運動スキルとの関係

幼児期は、成長をしていくために必要な様々な基本となる動きを身に付ける時期である。その意味では、幼児期において型にはまらない、自由で、いろいろ工夫し、多くの動きを体験をさせることが成長に強くかかわってくる。かっては、「鬼ごっこ」や「チャンバラごっこ」「ままごと」など「ごっこ遊び」が頻繁に行われていた。大人のまね（表現）をして、子どもなりに工夫し、各々の役割を演じて遊んでいたのである。そこには型にはまった規則はなかった。自由な遊びを通して様々な体力的要素を身に付けていたのである。前橋は、「運動の分類・振り分け」における４つの身に付けるべき基本運動スキル[6] 次のように挙げている。



（澤田幸男監修・前橋　明：４つの基本運動スキル）

これまで「表現遊び運動」における身体的活動について述べてきたが、実際に学生の授業における表現遊び運動の一例について照会する。

調査概要　□対象校：北海道せいとく介護子ども福祉専門学校　□受講生徒数１８人

□場　所：北海道せいとく介護子ども福祉専門学校視聴覚室及び体育館

１．授業の進行

（展開学習形態：グループ－６人、内ペア３組）

１日目	授　業　内　容	授業進行（方法）	場　所	備　考
午　前	１．自然での幼児の遊び ２．野外での幼児の遊び ３．固定遊具・鉄棒での幼児の遊び ４．操作性遊具を使った遊び	講義・DVD 〃 〃 表現遊び指導	視聴覚室 体育館	
午　後	○表現遊び運動の考案・創作 ○表現遊び運動の実践 ○ペアによる発表（表現遊び運動①） 評価の観点 ○関心・意欲・態度・要素 ○ペアによる考案例の完成度	○３グループ（２人ペア学習）考案・創作・実践を行う ○発表（評価１） ○健康・安全に実践する ○ペアによる表現遊び運動が適切にできているか	体育館	**本論発表**
２日目	授業内容	授業方法	場所	
午　前	５．大型遊具を使った遊び ６．サーキット遊び　絵本物語展開 ７．鬼ごっこ ８．伝承遊び	説明と実践 ○午後の課題につなげる（説明と模範）	体育館	
午　後	○表現遊び運動の考案・創作 ○表現遊び運動の実践 ○グループによる発表（表現遊び運動②） 評価の観点 ○関心・意欲・態度・要素 ○グループによる考案例の完成度	○グループ全体学習 ○考案・創作・実践を行う ○発表（評価２） ○健康・安全に実践する ○グループによる表現遊び運動が適切にできているか ○試験（評価３）	体育館	**本論発表**

２．学生の記録

GA のペア学習による表現遊び運動①

GA・ｐ１

遊びの名称：「動物けんけんぱ」

遊び方　① 表現動物（動きの表現ができる）を選ぶ。（ウサギ、ネズミ、カエル等）

② 遊び方はタンバリンやピアノの音に合わせて、動物の跳び方をする。

③ 両方向から行い、じゃんけんで動物を指名して負けた方が指名された跳び方をする。

④ケンケンパは変化の付けた配列を考える。

育成される要素

・巧緻性　・平衡性　・リズム感　・創造性　・模倣能力　・柔軟性

準備するもの

・フラフープ　・タンバリン　・ピアノ（体育館設置）

GA・ｐ２

遊びの名称：「あんたがたどこさ」

遊び方　① 遊びに使うラインを決める。スタートの位置を決める。

② 「あんたがたどこさ」を歌いながら、リズムに合わせて左右に移動する。「“さ”」の時は前後に移動する。相手の真似をして動く。

③ 最後まで間違わずに跳べたら成功。

アレンジ：「さの時に手をたたく」、歌のスピードを変える、片足で跳ぶ・・等

育成される要素

・巧緻性　・平衡性　・リズム感　・創造性　・模倣能力　・協応性

準備するもの

・ビニールテープ

GA・ｐ３

遊びの名称：「ボールはさみまねっこ遊び」

遊び方　① ボール（バレーボール程度）を股にはさむ。

② ボールをはさみながら、２人合わせて跳ぶ。

③ 腰を下ろし、ボールを落とさないように、いろいろな形をする。相手もまねする。

育成される要素

・巧緻性　・リズム感　・模倣能力　・協応動作

準備するもの

・バレーボール２個

GA のグループ学習による表現遊び運動②

遊びの名称：「まねっこ探しゲーム遊び」

遊び方　① リーダーと鬼を決める。

② 鬼以外はリーダーの真似を見つからないようにする。

③ 鬼はみんなの行動や動作をみて誰がリーダーかを探し出す。

④ 動作は、リーダーが鬼に見つからないようにトンボやカエル、タコなどの真似ををする。（鬼は３回まで答えることができる）

育成される要素

・巧緻性　・リズム感　・集中力　・創造性　・模倣能力　・協応動作

準備するもの

・コーン４個（行動する４隅におく）

GB のペア学習による表現遊び運動①

GB・ｐ１

遊びの名称：「ひょこ・へび・かえる」

遊び方　① じゃんけんをする。勝→指示（A）、負→動く（B）

② 遊び方は、勝った A が「ひょこ」と言う。B はひょこの真似。A 手をはたく、B ひょこの真似で激しく動く。

③ 同じ動作をそれぞれの真似で、やさしく、激しく表す。

④ A が２回手をたたき「全部」と言ったら、順番に真似をしていく。

育成される要素

・巧緻性　・リズム感　・創造性　・模倣能力　・柔軟性

準備するもの

・鈴、タンバリン（手を鳴らすのに、鈴やタンバリンでも行う）

GB・ｐ２

遊びの名称：「スゴロク進化ゲーム」

遊び方　① なりきる動物の順番を決める。いもむし・ひょこ・ウサギ・馬・ゴリラ・人間

② 体育館（長さは適度）にコーンで道順を作り、ゴールを決める。

③ 遊び方は、２名で向かい合いじゃんけんで動物の順番で進んでいく。早い方が勝ち。

育成される要素

・巧緻性　・平衡性　・創造性　・模倣能力　・柔軟性

準備するもの　・コーン１０個

－GB・ｐ２－以降、紙面の都合上省略する－

３．授業の指導を通して

学生の学習活動の一部分を照会したが、授業を行って感じたことは、学生同士が相談しなら、様々な「表現遊び運動」を多岐にわたり考案し実践することができるということがわかった。今回の授業では数例の照会と作成のための資料を準備した。しかし、より良い授業、学生への確かな知識・理解・技術力を身に付けさせるためにも、多くの資料と多岐にわたる事例時間の確保が不可欠に感じた。（授業を実施して感じたこと。より一層の研鑽を積んでいく所存である。）

子ども達は、年齢とともに、これまでに見ているものや観察してきた動物や植物など、命あるもの、動くものに強い関心を示していく時期である。そのために、学生は将来保育者として、子どもたちが今までに見て観察し感じた動物や自然の動きの特徴をとらえて、自分なりの表現をして、遊びを行うことができる指導が大切である。

保育者として指導を進めるなかで、表現遊び運動の身体活動の重要性を感じ取ることが必要であり、援助や指導ができる力を身につけなければならない。

領域「表現」はその意味で、人と関わる人間関係、物や自然と関わる環境、遊びの表現と密接に関係する言葉、そして考え方や活動力の源である健康が大きく関与してくることが理解できる。

お わ り に

次期幼稚園教育要領、小学校学習指導要領及び中学校額指導要領が平成２９年３月３１日に告示された。特に幼稚園においては、今年度の周知・徹底期間を経て、平成３０年度から全面実施となる。小学校においては周知・徹底及び移行期間も含めて３２年度から全面実施となる。

今回の改定では、教育要領に「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」が明確に示されるとともに、各学校段階の円滑な接続が重視されている。ここに、幼児期における教育が、生涯にわたる人格形成の基礎を培う重要性であることを述べている。「資質・能力の三つの柱は幼・小・中・高を通して伸びていく。幼児期においては、子どもの自発的な活動である遊びや生活のなかで、感性を働かせてよさや美しさを感じ取ったり、不思議さに気付いたり、できるようになったことを使いながら、試したり、いろいろな方法を工夫したりすることなどを通じて育まれていく」。小学校以降では、資質・能力は、「知識・技能」「思考・判断・表現力」「学びに向かう力・人間性等」と発展していく。[7]と、中央教育審議会幼児教育部会では述べている。このことからも、小学校入学当初における生活科を中心とした「スタートカリキュラム」との接続性が伺える。

幼児教育においては、身体活動指導面において一つのスポーツ的な遊び（サッカー遊び中心になるなど）に偏ることなく指導することが大切であり、さらに、幼稚園教員は小学校教育の理解を、小学校教員は幼稚園教育の理解を通し、関連した教育指導を進め、子どもたちが、身体的に、社会的に、知的に、精神的に、そして情緒的にも良好に成長していくためにも表現遊び運動指導の充実が欠かせないと考える。

参考文献

１）谷川俊太郎 詩集「かえるのぴよん」１９７６年「国土社」詩の本１８
２）幼稚園教育要領解説（現行）　平成２０年１０月　文部科学省６６ｐ
３）幼稚園教育要領新旧対照表　文部科学ｐ３、４
４）引用日本幼児体育学会認定 幼児のリズム運動指導員養成テキスト・幼児のリズム運動「編集代表 前橋　明」２０１２年　大学教育出版
５）幼稚園・保育所実習パーフェクトガイド「編集代表 小櫃智子」２０１３年　わかば社
６）澤田幸男 監修・前橋　明 編著　「幼児の体育」２０１０年　大学教育出版
７）文部科学省幼児教育部会における審議のまとめ（平成２８年８月２６日）